慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「泰山木」の樹 : 故関口一郎先生を偲んで
Sub Title	
Author	星, 俊作(Hoshi, Shunsaku)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2003
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・ 文学 No.35 (2003. 2) ,p.240(5)- 236(9)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20030210-0240

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「泰山木（たいさんぼく）」の樹

～故 関口一郎先生を偲んで

星 俊作

私は総合政策学部の三期生として一九九二年に入学し、以来卒業後のお付き合いも含めて約十年弱の間、関口先生にお世話になりました。今回、湘南藤沢キャンパス（SFC）での教え子の立場から、日吉紀要に関口先生の追悼文をということで平高史也先生からご連絡を頂きました。何を書いてよいか躊躇しましたが、私なりに振り返った関口先生のお人柄や思い出をそのままご紹介したいと思います。

誰もがご存知の関口先生の顔といえば、ドイツ語教授法の第一人者としての先生です。

関口先生の考案された新しいスタイル、つまり、パートナーアルバイト、ゲーム、ディスカッションといった発話を主体とした授業スタイルは、それまでに自分が受けたどんな外国語の授業よりも実践的かつ体系的でした。アイディアマンを自認する先生の創意工夫の賜物だった手作りのプリント教材やOHPは、基本的な文法事項の紹介にとどまらず、日常生活の新鮮な話題や身近な人物を題材とした非常にたくさんの例文が溢れており、日常のコミュニケーションの延長として、ドイツ語を学ぶこと（＝日本語以外の言語で生活を語ること）の楽しさを私たちに喚起させるものでした（このプリント教材は各地のドイツ語教員の方々からの引き合いがあまりに多かったため、後に某出版社から出版されたと伺っています）。

プリント教材には、ハードボイルド志向の先生の趣味で「ゴルゴ13」の漫画の切り抜きが多用されていたり、例文には「北の家族」や「甚八」（先生や学生がよく通

っていた湘南台駅前の居酒屋）がたびたび登場していたりと、遊びの要素が満載でした。一方で、基本センテンスがコミュニケーションの「部品」のように組み立てやすい形で紹介されており、これらを組み合わせることで、学生が授業中だけでなく、日常の生活の中でもドイツ語で簡単に話すことができるような工夫も凝らされていました。ＳＦＣでドイツ語を学んだ一人の学生の率直な感想としては、主体的な学習を促すこの仕掛けこそが、関口先生の外国語教育法のすばらしい点であったと思います。

先生は、企業や学外組織との諸活動への学生の登用（モチベート、育成）にも積極的でした。マルチメディア流行りの最初の頃、新しい嗜好を必要とする企業から教材作成などの依頼を持ちかけられると、先生はそれを企業とのプロジェクトとして運用し、ＮＨＫ番組制作支援・教材出版・出版社教材ビデオ制作などに多くの学生を登用しました。先生のプロジェクト管理のスタイルは、マルチメディアコンテンツ制作のノウハウだけでなく、番組や教材の見せ方や内容そのものに関しても、学生の意見を広く求め学生自身にそれを実践させるやり方で、実際それが企業からも高い評価を受ける成果に結び付けていました。企業プロジェクトを学生に自己実現の場を提供する機会として活かした先生のスタイルは、実用性や即戦力を旨とするＳＦＣのモットーを地でいっていたと思います。

関口先生のもう一つの顔は、湘南藤沢キャンパスの学生部部長として、学生と教職員の交流の要（かなめ）的存在としての顔です。

新設キャンパスとして、何事も初めてのことだらけだったのは学生ばかりではありませんでした。研究活動以外のキャンパス生活においても教職員と学生が積極的に歩み寄り、学生の意思や行動力をポジティブに評価しながら新しいものを創り出してゆくという、従来のキャンパスとは全く違う新しい常識の中で、教職員の方々にとっても、初めての事だらけだったにちがいなく、数々のご苦労と調整が必要だったと思います。

そんな中でも先生は学生の最もよき理解者として、学生のさまざまな活動を辛抱強く支えてくださいました。

勿論、学生部長ですので、悪ノリが過ぎてキャンパス運営に間違いが起こらないよう手綱をとる立場にもありましたが、頭ごなしに「これはＯＫ、これはＮＧ」というのでなく、学生が納得するまで話を聞いてくださり、時には酒を飲みながら、話し込まれるような方でした。学生の話をとことん聞いてくださる先生というのはそれほど珍しくはないのかも知れませんが、自分の息子や娘ほどの若造たちに、ご自身の目線を合わせて話をしてくださる関口先生に誰もが親しみを感じていました。「七夕祭」というＳＦＣのキャンパスイベント（この日は、学生が浴衣着用で授業に出席して良いことになっています）で、関口先生が昼間から率先してハッピ着用で講義をしてくださった姿などは、今でも忘れられません。

さて、私が先生とご一緒する時間がもっとも長かったのは、ドイツ語の共同研究室でした。先生はドイツ語共同研究室を開放し、私を含めて数名のＳＡ（スチューデント・アシスタント）が「常駐」していました。先生が教材原稿を仕上げるのが夕方以降のことが多かったこともありますが、ＳＡは授業が終わるとまるで自分の家に帰るように研究室にやってくるのが日課でした。そうして、大好きなお酒を机の傍らに愛用のワープロで教材を作っている先生を横目に自分たちの課題やレポートに勤しみ、先生が原稿を仕上げるとそれを印刷・パッケージしてから夕食に行くという、なんだか家族のような日常感のある研究室でした。

ドイツ語研究室にはまた、教材作成を手伝うＳＡの他にも、実にさまざまな学生が出入りしていました。毎日夕方になるとクラブハウス棟運営スタッフや体育会関係者など、ドイツ語と全く関係のない人も含めて実に多くの学生が「関口先生こんにちは」といってやってきては、キャンパス内の諸々の出来事を話して帰っていきました。研究室というよりはちょっとした「社交場」になっており、おそらく先生はキャンパス一の情報通の先生でいらしたと思いますが、それはやはり先生のお人柄ゆえだったと思います。

私たちがアシスタント業務の分担や進め方について揉める時も、来室した学生がキャンパス内イベントに関して議論しているときも、先生は、話にあれこれと口出しするということはなく、ご自分の仕事をしながらさりげ

なく話の経過を見守ってくださり、その場で直接に何かをおっしゃることは殆どありませんでした。それでも揉め事が自然と解消したり、議論が正しい方向に収束するのは、「関口先生が聞いていらっしゃる」ということを皆が意識しているからだったような気がします。先生は直接説教をするタイプではありませんでしたが、「君たちを全面的に信頼しているから」と「君の言いたいことは全部わかっているから」という強烈な殺し文句が常でした。このようにおっしゃられては、殆どどんな状況においても皆「何とかしなければ」という気にさせられてしまう無言の力がありました。また、言葉では語らず自ら模範となって行動で示すようなところが多かったのも、先生の美学だったと思います。ある朝、片付けが煩雑なままの共同研究室が、ピカピカに掃除され、レイアウトまでも変わっていて、ＳＡ一同が青ざめたことがありました。煩雑な研究室に業を煮やした先生は、前の晩の夜中にお一人で掃除をして、机や棚の移動をし、「研究室の使い方」という紙をしたためてから、ご自分の個人研究室に泊まられたのでした。当時はあまりに恐縮して誰もそのことを口にすら出せず、その後は、心なしか研究室が整頓されるようになりました。この時のことは、いつか笑い話にできる頃に先生にお話を伺おうと思っていましたが、その機会を逃してしまったのが大変心残りです。

他界される前の数ヶ月間、病院で何度か先生にお会いする機会がありました。先生は病気について弱気なことを何ひとつおっしゃらずに、次の学期の授業準備やキャンパス行事のことばかりを口にしておられました。周りに心配をかけまいというお気持ちも非常に強かったでしょうが、何よりもやはり、本当にＳＦＣに行きたくて行きたくて仕方がなかったのだと思います。そんなこともあり、他界される3ヶ月前、ＳＦＣの七夕祭にお連れしました。車椅子とはいえ、祭り真っ盛りのキャンパスの中を学生たちと一緒にご覧いただき、大変喜んでいただけたご様子でした。来年もきっと見に来ましょうとお話していたのですが、叶わず残念です。

二〇〇二年七月六日、やはり七夕祭の日、ＳＦＣで関口先生を偲ぶ樹を植樹しました。「泰山木（たいさんぼく）」という、初夏に大きな白い花を咲かせるモクレン科の高木です。先生と一緒にキャンパスを廻ることはも

うできませんが、いつまでも大好きなＳＦＣから私たちを見守っていただきたいという思いを込めて、先生の奥様と一緒に植える樹です。ＳＦＣを訪れる機会がありましたら、是非、関口先生の「泰山木」の樹に会いに行っていただければと思います。